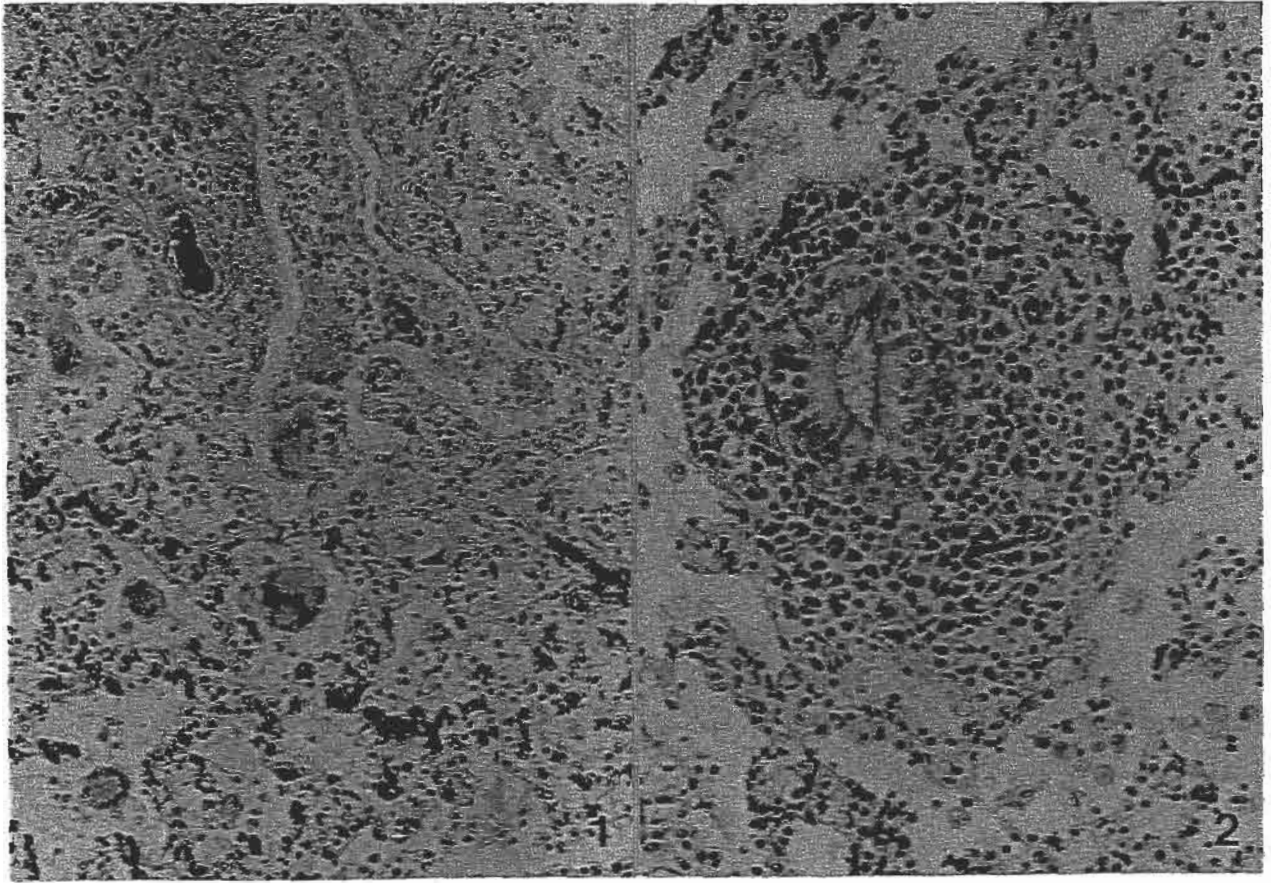


馬胎仔の肺

競走馬総合研究所病理研究室出題 第31回獣医病理学研修会標本No.551



動物：馬，サラブレッド種，流産胎仔（胎齡9ヵ月）。

臨床的事項：母馬は妊娠9ヵ月で突然に流産した。母馬の当日の体温は37.9℃で臨床的に異常は認められなかった。同居繁殖牝馬4頭には異常なく，周辺牧場にも異常は発生していない。なお母馬の年齢は6歳で産歴不詳。

病理解剖所見：肺は胎仔性無気肺で，小片は水中に沈下。断面は充実性で軽度鬱血。脾臓はやや大きく，脾材明瞭で濾胞不明瞭。心筋褪色。その他著変なし。

組織所見：特徴的所見は以下の4点に要約された。1) おびただしい数のマクロファージ (Mφ) の肺胞及び細気管支腔への遊走 (写真1, HE, ×180)。Mφの形態は，細胞膜が不整形であり，細胞質は豊富で弱好酸性，微細顆粒状を呈していた。2) 多核巨細胞 (異物巨細胞とラングハンス型巨細胞) がMφに混じって肺胞内，細気管支腔に多数認められた (写真1)。3) 細気管支周囲 (写真2, HE, ×220)，小葉間結合織及び肺胞壁などの間質へのプラズマ細胞及び単核性細胞を主体とする

間葉系細胞の浸潤。この単核性細胞が細気管支腔や肺胞内へ遊走する所見があり，Mφの由来が示唆された。

4) 肺胞は腫大したII型肺胞上皮細胞が内張りしていた。肺胞壁は間質結合織が軽度に増生し，水腫性に肥厚していた。

病原・病理学的所見：母馬血清の馬鼻肺炎，ゲタ，アデノ及び動脈炎ウイルスに対する抗体は陰性であった。肺組織中の各種病原体の染色，金属（鉄，銅，亜鉛，鉛），シリカ，界面活性物質，免疫グロブリン等の検査でも特定の物質は見出されなかった。

考察と病理組織診断：提出標本の組織所見は多数のMφの遊走を特徴とする間質性肺炎であり，ヒトの「剥離性間質性肺炎」あるいは「特発性間質性肺炎」と定義されるものに類似していた。加えて，本例では巨細胞の出現が目された。

以上のことから病理組織診断名は，「巨細胞を伴う特発性間質性肺炎」とした。